

実践報告 (Report)

保育者・教師養成課程における初年次教育としての施設(学校)見学を充実させる事前学習の実践(2)

——学生の主体的学びの促進を目指した改訂版「施設調べ」の試み——

The Pre-Study Practice To Enhance the Effect of School Visit as Education of the Freshman in the Training course of Nursery and Elementary school Teacher(2)–An Attempt to Enhance Active Learning of the Students by Revised Version of the Preparatory Task for School Visit–

服部 次郎
Hattori Jiro*

摘 要

専門的な職業のひとつである保育者・教師の養成課程では学びの初期段階から、見学実習を取り入れ、現場の感覚を体験させることが重要である。この見学を実のあるものにするためには事前学習が必要である。本実践では、これまでの反省点を反映させた事前学習プログラムを用いてその効果を検証した。具体的には、負担軽減のため課題を減らし、人の発達の連続性を意識させる働きかけを強め、「施設調べ」の内容をより具体的にすることで、施設見学の価値を一層高めることができると予測した。その結果、改訂の効果が感じ取れる考察が見られた。例えば、「自分が担当する学年は、子どもたちの発達の中の一部である。ただその時を保育するわけではなく、その子たちの将来のために、どのような保育をすればよいのかを考えることができた。小・中・高を観察して、幼稚園時代に何を大切に保育をしたらよいか学べた。」といったものである。さらに最終アンケート結果で施設調べをすることが「とても役に立った」という評価が以前より増し、その理由も多方面に及んでいた。このように、今回の研究においても「学びの主体性」に焦点を当てた時、「施設調べ」の活用（「調べ学習」）が大きな意義をもつことが確認された。

キーワード：初年次教育、施設（学校）見学、学びの主体性、調べ学習

Key words : Education of the Freshman, School Visit, Activeness in Learning, Preparatory Task

1. 研究の背景と目的

専門的な職業のひとつである保育者・教師の養成課程においては、初年次から現場の感覚を体験させることの重要性が叫ばれてきた（須藤ほか 2009）。初年次の施設（学校）見学の効果としては、現場を体験することによって、目指す職業へ就く気持ちが強くなるというキャリア教育的効果（奥ほか 2009）、そして養成校での理論学習への

意欲が高まるという相乗効果（中津ほか 2007）が期待される。そのため、近年では、初年次教育課程（カリキュラム）の柱のひとつとして、施設見学、学校見学を取り入れる養成校が普通になってきた（中津ほか 2007）。この流れの中で、筆者は学生の学びをさらに促進するためには、単に見学させるだけでは不十分であり、養成校教員による工夫が必要であると考えてきた。これまでの研究（鈴木 2006）においても、「ただ見る」場合と「目的意識も持って観察する」場合とでは大きな違いが生まれることが述べられている。具体的には、「意識して観察するとたくさんの発見があり、観察内容も広がり、記憶にも残り、内容について考えることもできる」ということである。このような目的意識を持って観察するという姿勢を生み出すには、何らかの工夫が必要と思われる。その工夫に大きな関係をもつと考えられる要素のひとつが、学びを促進させる内発的動機づけといえる（鈴木 2004）。

鈴木 の論述とも一致すると思われるが、筆者の活用してきた「施設調べ」の枠組み（服部、2012）では、その中に、キャラクターを登場させるといったストーリー性、見学実習のテーマをあらかじめ決めておくなどといった問題解決を促す設定など行うように学生に指示した。これにより受講学生の内発的動機を高め、学びの主体性や思考活動を刺激することができると考えた。

そこで今回の研究においては、施設（学校）見学の事前学習と事後学習が、受講学生の内発的動機を高め、初年次教育において有効であることを追試するとともに、昨年度の反省を踏まえて、筆者がこれまで重視してきた「施設調べ」の枠組みに更なる改良を加えたことで、学生がこれまで以上に「主体的な学び」ができると予測した。ここでの主体的学びにとっての重要な概念は、内発的および外発的動機付けであるため、この主体的学びがなされているかどうかの基準としては、アンケート調査から得た「施設調べ」が役に立ったかどうかの程度を利用した。つまり、学びを進める上で「調べ」をすることが「役に立ったかどうか」という実習生の報告を基準とした。ただしアンケート調査での今年度 20 人の学生は、昨年度とは別の対象者であるため、単純な比較はできないと考えている。

次に、昨年度の反省から、改善を図った点は以下の通りである。

第一は、学生の課題作成における負担の軽減である。「結構前期に授業が詰められていて、多くの授業でもレポートがあったり、時間が少ないので、まとめを書くことが多少苦痛だった。」や「他の授業での課題も多くあり、なかなか時間がなくて大変だった。」といった昨年度の学生の思いに配慮して、今年度は、「施設調べ」を作成する代わりに、課題としてあった「観察記録」と「実習の記録」は提出しなくてよいこととし、この面での学生の負担の軽減を図った。「施設調べ」を最も重視した理由は、保育者を目指す学生にとって、「施設調べ」が、先にも述べたように、一人ひとりが自分の主体性を最も発揮しやすい仕組みを備え、かつ将来保育者・教育者を目指すものにとって、その資質を高めるには、とてもよい学び・訓練の機会を用意していると考ええるからであり、この推測は今回の結果にも表れている。

第二は、施設（学校）見学の視点の明確化である。『施設調べ』は実習時間の短さと、授業のみを見るというところから、あまりやって良かったと思えるほどの成果を感じない。」や「幼稚園については、意味があったと思うが、小、中、高については無意味なのではないかと疑問に思うこともあった。」という見学実習に行った学生の意見についてである。この点については、先の論文（服部，2012）においても、すでに基本的な考えを述べたように、「施設調べ」をすることの意義についてこれまで以上に丁寧な説明をおこなった。具体的には、受講学生が将来、高校や中学校で教えることを考えておらず、保育園・幼稚園あるいは小学校で保育・教育することを考えている場合においても、自分たちが保育・教育する年齢の子どもたちが、将来、中学校や高校でどのような姿で生活し学習しているかを少しでも知っているのと知らないのでは、自分が保育園・幼稚園等で実際に保育・教育する際に、「大きな差が生まれるであろう」ことを強調しつつ説明した。この際、心理学を専攻した筆者の頭の中にあっただものは、Erikson（1963）の心理社会的発達段階説である。発達の著しい子どもたちの保育・教育を考える際には、Erikson の発達段階説にもあるように、発達の連続性を意識すること、つまり現在の子どもの課題について考えるとすれば、必ずその子どもの生育歴および置かれた環境を考慮し、かつ将来への見通しを立てて考えること、が大切である。つまり子どもから大人へという、連続した発達の流れの中で、自分が関わる一時期を理解し、その時期に将来を見据えた実践をする必要性があること、そのためには幼稚園・小学校・中学校・高校のすべてを見学しておくことは極めて有効であることを機会がある度に説明し、4 教育施設を見学実習する意義（発達の視点）の明確化を図った。この「大きな差が生まれるであろう」という推測の正しさについては、例えば、「施設調べ」に見られる昨年度の学生の次のような記述からも十分うかがえる。「中高を見てきて幼児期に大切なこと：中高では、もう大人同様のことができる子どもを見てきました。中高の子ども達があたり前に暮らせるためには、幼児期のうちに、ありがとう、ごめんね、を言える強さ、不安そうにしていたら安心感を与え、そこから身につく自信、また出したものはきちんと片付けるといった生活習慣や友だちと協力して何かをする助け合いの心や協調性を幼児期にしっかりと学ぶ必要があると思った。先生や友だちが話をしているときは、静かにしっかりと聞くということも教える必要がある。この頃の人との関わりや身につけた生活習慣は、後の性格や習慣にも影響してくるので丁寧に身につけていく手助けをしていきたいと思った。」

第三には、「施設調べ」の枠組みをより具体的な内容のものにしたことである。昨年度は、「施設調べ」の「2. 自分のテーマについて学べたこと」については、「自分が先生であれば、どのようにしてみるか」という設問だけで、具体性に欠けたため、今回の「施設調べ」のでは、表 2-2 のように、例えば「自分が先生であれば、①であげたことについて、『○○のような工夫をして、生徒たちに□□が学べるようにしたい。その理由は△△である。』と説明する」といった具合に、学生が保育・教育す

る立場であったらどうするか、どうしたいかを具体的に想像して記述するという具合に、より現場を意識させ、内発的動機の高まりやすい設定とした点である。

2. 研究方法

2-1. 実践対象

「ふれあい実習Ⅰ」の授業は、担当者8名が連携して運営し、1年生前期に開講される初年度ゼミとなっていた。しかし今年度に関しては、これまで後期に実施されていた本学独自の附属幼稚園での観察実習の単位化を図るため、1年次に通年で開講されることとなった。この点を除けば、基本的には昨年度の流れにそって進められた。この授業の対象者は教育学部保育・初等教育専修の学生82名および初等中等教育専修の学生89名である。筆者は、保育・初等教育専修の学生20名を担当した。

2-2. 授業の進め方

表1に、2012年度の授業の流れを、前期分を中心にまとめた。16回分の時間を用いて、大学附属の4教育施設（幼稚園・小学校・中学校・高校）を順に見学し、その後、討論の時間が用意されている。これを4回繰り返し、最後に発表会を行い、終了という流れになっている。発表会では、学生一人ひとりが4回にわたる見学実習から学んだことなどを報告した（なお、この授業には新入生が早く大学生活になれるような内容も含まれている）。

事前学習として「施設調べ」を課すことは、第2回目の授業で伝えた。その際、この準備をすることの大変さに理解を示しつつ、しかし何事も準備あってこそ、短い時間の学校等見学がより意義のあるものになることを、筆者のこれまでの経験から説明した。この経験は、社会心理学者Festinger(1960)の認知的不協和理論(Brian M.Foss, 1972)に基づいたものである。つまりイソップ物語にある「キツネとすっぱいブドウ」の逸話で知られるように、「人は自身の中にある矛盾する認知の不協和を低減させることができると思うような情報を求め、不協和を増加させると思われるような情報を避ける」というものである。つまり学生の心に、「短い時間の学校等見学はあまり意味がない」という考え（認知）が生じた時に、教員から与えられた「しっかりと準備をすれば学ぶことも多い」という情報により、二つの認知の間に不協和が起こる。不協和理論によれば、学生は、あまり意味がないという認知を低減させ、大変な状況の中でしっかりと準備すれば学ぶことも多くなるという認知を増加させることでこの不協和（矛盾）を解消できるよう、態度を変化させることになるというわけである。

さらに昨年度の反省を活かして、既に述べたように、(1)提出課題を2つ減らし、(2)4教育施設を見学する意義の明確化を図るため、いろいろな発達段階にある児童・生徒の教育現場を見学しておくことは、将来、幼稚園・保育所で教えることになって、筆者の体験および先輩たちの経験談からも役に立つであろうこと、を説明した。

表 1. 2012 年度「ふれあい実習」の流れ

回数	授業日	内 容
1	4/5	新入生ガイダンス（保初専修+初中専修）
2	4/10	クラス別ガイダンス（1 クラス 20 名程度）
3	4/10	クラス交流会（バレーボール実施）
4	4/24	実習指導ガイダンス（保育初等教育専修と初等中等教育専修で別）
5	5/1	高校での見学実習（服部担当クラス）
6	5/8	高校での見学実習について討論・発表し、まとめ（施設調べ）完成
7	5/8	クラス交流会（ドッチボール実施）
8	5/15	中学校での見学実習（服部担当クラス）
9	5/22	中学校での見学実習について討論・発表、まとめ（施設調べ）完成
10	5/22	図書館および歴史館ツアー
11	6/5	幼稚園での見学実習（服部担当クラス）
12	6/12	幼稚園での見学実習について討論・発表し、まとめ（施設調べ）完成
13	6/19	小学校での見学実習（服部担当クラス）
14	6/26	小学校での見学実習について討論・発表し、まとめ（施設調べ）完成
15	7/10	まとめの発表会(1)
16	7/10	まとめの発表会(2)／ふれあい実習Ⅰのまとめ・アンケート等提出し終了
		附属幼稚園 事前指導
	2/22	プレ実習
	2/25	プレ実習
	2/26	事前指導
	2/27	プレ実習
	2/28	プレ実習
	3/1	

以上の説明に加えて、見学が終わったら、事前に指示されたようにまとめをすること、そして討論・意見交換をした上で、見学して体験したこと、発見したことなどの意味を、きちんと吟味した上で自分なりに整理し、まとめを作成しておくこと（「施設調べ」の完成）で、自分の真の学びの成果とすることを実感できるであろうことを強調しておいた。この点については、学生の最終アンケートからも確認できるものと予測している。

学生には、服部（2012）で用いられた項目に加筆等変更を加えた「施設調べ」の様式（A3 用紙両面）を配布した（表 2）。変更した部分（裏面）は下線で示した。

表 2-1. 学生に配布した「施設調べ」の様式（表面）

1	訪問先の実習機関に関する事前調べ
2	見学に関する注意事項等の事前調べ
3	見学の際の観察の視点と記録の書き方についての事前調べ
4	今回の観察実習における自分のテーマの設定

表 2-2. 学生に配布した「施設調べ」の様式（裏面）

1	訪問先の実習機関に関する情報，注意点，観察の視点と記録の書き方について事前に調べたことによって学べたこと
2	自分のテーマについて学べたこと
2-1	<u>「今回の見学実習で生徒の様子を観察して，良い点や気になる点があったか，又，自分が保育・教育場で教えるときにどのような点を大切にしたいと感じたか」などについて記述しなさい</u>
2-2	<u>今回の見学実習の授業の中で，自分が担任であったら</u>
①	<u>活用したいと思ったこと</u>
②	<u>自分が先生であれば，①であげたことについて，「○○のような工夫をして，生徒たちに□□が学べるようにしたい。その理由は△△である。」と説明する</u>
③	<u>上の②で述べたことで，「今回の見学実習の場における生徒の姿から，自分が教える立場に立った時，特にどのようなことに力を入れたいか」などについて自由に意見を述べなさい</u>
3	観察実習を終えての感想
4	<u>実習訪問した次の週に予定されている討論，具体的には，グループ討論や全体の場での発表・意見交換等を通じて発見したこと，学んだこと</u>

変更の理由は，「観察」という体験で終わるのではなく，当事者意識をもたせることその他，より具体的な設問により学生の考察を深めさせることを目指し，同時に，設問二つを一つにまとめたためである。

2-3. 学習効果の評価方法

本実践の効果については，授業の最後に実施した授業アンケート（一部加筆した部分は下線で示した）と学生の作成した「施設調べ」の内容という二側面から評価した。アンケートの内容は以下の通りである。

表 3. 本実践の効果を評価するために用いたアンケートの内容

「ふれあい実習Ⅰ」（平成 24 年度前期）授業アンケート
平成 24 年 7 月 10 日（火）担当教員 服部 次郎
今回の「ふれあい実習Ⅰ」において，4 か所の実習機関を見学実習するにあたって，事前に「施設調べ」を作成してもらいました。時間はかかったと思いますが，これまでの教員の経験から必ず役に立つものと思い，実施いたしました。学生の皆さんの率直な意見・感想をお願いいたします。

問1 役に立った程度について尋ねます（最も近い数字に○をつけてください）

5	4	3	2	1
とても	ある程度	どちらともいえない	あまり役に	ほとんど
役に立った	役に立った		立たなかった	役に立たなかった

問2 その理由は何ですか。自由に記述してください。

問3 （問1で5、4と答えた方に尋ねます）既に問2で答えていただいたかもしれませんが、どのような内容が、どういう理由で、自分の学びに役に立ったか、より詳しく説明してください。

問4 「施設調べ」の裏も完成させてみて、このような作業をすることは自分の専門家としての資質を高めるのにどのように役に立つと思われるか、自由に意見を述べてください。

問5 この授業で4か所の教育機関を見学実習しました。今このことを振り返ってみて、感じたこと、学んだこと、その他どのようなことでも結構ですので、あなたの意見・感想等を自由に記述してください。特に、自分が将来働く場で出会う児童の発達を考える際に、他の年齢層の児童の授業等を見学したこと、またそのための調べをし、まとめの作業をしたことはどの程度、またどのように役に立ったかできるだけ詳しく述べてください。

○協力ありがとうございました。

（注）「施設調べ」については後輩学生のためや、私の授業改善研究の資料として活用させていただく予定です（名前は出ません）が、それは困るという方がおられましたらお知らせください。

（注）このアンケートも含めて、すべての個人課題（4回の施設調べ）とグループと討論記録を総合して評価をします。締め切りは、7月10日（火）です。

3. 結果

まずは、アンケート結果について報告する。今回も、「施設調べ」が役に立った程度について尋ねたところ（問1）、20名中14名が「とても役に立った」、5名が「ある程度役に立った」、1名が「どちらともいえない」と回答した。「どちらともいえない」と答えた学生1名も、アンケートへの具体的な記述を見ると、自分自身についていえば「目的やテーマ設定は役に立つと思った」と答えている。「どちらともいえない」と答えた理由は、他の学生の課題への対応の仕方などに疑問を感じたためであり、「施設調べ」という課題をすることの意義とは、やや視点が異なった回答と解釈できる。そのように考えると、20名全員が「施設調べ」は「役に立った」と感じ、この課題の意義を認めていると解釈できる。

先回は、「施設調べ」が役に立った程度について尋ねたところ（問1）、20名中13名が「ある程度役に立った」、5名が「どちらともいえない」そして1名が「ほとんど役に立たなかった」と回答していた（ただし、記述された内容を検討した上での最

終的な結果としては、部分的に「役に立った」と述べた学生を含め、19名（95％）が、「施設調べ」を役立つものと感じていた）。前回と今回の差は、対象学生が異なるため、単純な比較はできない。しかし少なくとも、「とても役に立った」と回答した学生が、前回は0名、今回は14名となっており、これは極めて大きな特徴であるといえる。

表4-1. 「施設調べ」に対して価値を認めた13名の学生が、その理由として挙げて記述した内容(2011年)

- 事前に施設について調べることで、学校の教育目標とかカリキュラムとかが分かったので、見学するときに少し意識ができた。
- 教育目標などを事前に調べることによって、授業を展開する先生方の目的などを理解できた。
- そこの教育理念等を理解し、それについて着目して観察することができた。
- 事前に調べることによって多くの視点から見られたのでよかった。
- テーマをはっきりさせてから見学実習に行くことができたので見たいポイントがはっきりしていて良かったと思う。
- 事前に自分の見たいポイントが決めてあったのでレポートをまとめるときにやりやすかった。
- どのようにメモをとるか、どこに注意してみるか、がわかってよかった。

表4-2. 「施設調べ」に対して価値を認めた19名の学生が、その理由として挙げて記述した内容(2012年)

- 実習前に実習について考えることができる。行き当たりばったりの実習はなくなる。その年齢の目標に応じた先生の動きを具体的に読み据えることができました。事前に調べることによって、実習の濃度も変わってくる。
- 保育現場でも「おたより」という形で、先生が手書きで作るものも少なくないので、…まとめる練習になる。調べてから行くことによって発見できたところも少なくないし、特色も知ることができた。
- 無知で観察するより絶対に内容の濃い観察になった。まとめるのは大変だったけれど自分のテーマを決め、観察時の注意事項（も調べ）、観察後の振り返りができたので、自分自身の中での確認ができた。
この事前調べがなかったら、なんとなく観察して、なんとなく「あーこんな感じだったのかなー」と振り返るくらいで終わっていた。目的をもって物事に取り組むことで、意識が高まり、充実した内容になりました。「目的をもつ大切さ」を本当に感じました。
- 最初は役に立つのかと思っていたが、全部終えてからは客観的に観察でき、役に立つと思った。
自分が担当する学年は、子どもたちの発達の中の一部である。ただその時を保育するわけではなく、その子たちの将来のために、どのような保育をすればよいのかを考えることができた。小・中・高を観察して、幼稚園時代に何を大切に保育をしたら

よいか 学べた。具体的には、集中力、積極性、協調性、敬語の使い方などです。

- 絵をかくことや色を上手に使うことなど、将来役に立つと思いました。教育目標等を知ることで…観察するときのテーマが決めやすかった。

マナーや注意事項、実習をするにあたって必要な物などを文字に表して確認することで、改めて自覚することができました。事前に調べ、実際に体験し、反省するという予習・復習の関係が重要であることを実感しました。

- 施設調べで調べてことを頭において観察することで、より深く理解できた。後で、まとめることで、自分の考えを表現する機会となり、実習を振り返ることができた。実際の先生方がおこなっている保育・授業の様子を思いだして、取り入れたいことや、自分だったらこうしたいと思うこともでき、自分の保育者としてのあり方を考えることができた。予習・復習と勉強と同じような立場をとれた。

- 事前調べをすることで、自分なりのテーマを設定し、目的をもって実習に臨むことが出来て、本当に自分のためになる実習となったと思う。

一つのテーマを設定し、そのテーマについて各段階（幼・小・中・高）で見学実習できたことで、一つの結論が得られ、今後の仕事に活かせる。

- 施設調べの構成を考えたり、どうすれば見やすくなるか、などを考えながら書くということの大切さを学びました。テーマを決めることも大切で、それで無駄な時間を過ごすことなく観察できました。事後のまとめをやりっ放しにならないので自分にとってとてもためになりました。

- 初めは、カラフルなデザインでまとめることが苦手だからと、施設調べを作ることに抵抗があったけれど、やってみると楽しくて、今後のために活かしていけると思いました。

施設調べにおいて教育理念や目標を事前におさえておくことで見学する機関への理解も深まり、注目するポイントを明確にすることができました。またテーマを設定することで自分の見たい部分を見極めることができました。

- 施設調べでは、相山の共通した理念としての「人間になろう」と共に、各段階において様々な目標が定められていました。その事を事前に調べて、頭においておくことで、観察する上で、どのようなことを大切にしているかなどを、よく理解して見学実習に参加できました。また観察のポイントや注意点などを知り、まとめることで、より頭に残りやすく、充実した時間になったと感じたので、とても役に立ったと思いました。

- 事前調べをすることで、見学実習に準備万端であたることができた。事前に観察の視点などをしぼることによって、どこに注目して、集中して観察すればよいかははっきりするので、短時間で集中して見学することができた。

施設調べを作成することで、構成や色使いを工夫しなければならないので役に立つと思いました。また見やすく、分かりやすく書く工夫をすることも、将来に活用できると思いました。

- 学校ごとに特徴や自分自身でテーマを決めて実習に取り組むことで、中身のある実習になったし、今後の実習にも役立てると思った。

○事前に施設調べをすることで、全く知らない、分からない環境に行くわけではなくなったので不安が軽減したと思う。しかし、他の課題もある中での施設調べだったので、大変だと思うときも多く、評価を4としました。

絵を描くことや、どんな色を使った方が見やすいかなども学ぶことができた。絵を描いたりするのは苦手だけど、1年生でひとつ練習ができたと思えば、そんなに苦痛だったとは思わない。

○事前に教育施設の特徴を知っておくことで自分がそこで何を学ぶことができるのかを考え、テーマを設定し、実習に臨めると言う点で役に立った。また実習後にまとめることで、実習を見直し、反省をする良い機会となった。

実習を振り返ることによって自分が学んだことをもう一度まとめなおすことができ、実習で得たものをきちんと自分の知識として身につけることができる。色鉛筆や折り紙を使ってきれいにまとめることが出来、実際に保育現場で掲示物を作る時に役に立つと思う。

表5-1. 「施設調べ」の完成に対して価値を認めた13名が問4に対して記述した内容(2011年)

○自分が学んできたことを細かくまとめることで、先生方の工夫等がより分かった気がした。見学した時は、ただ気づいた事をメモしていただけたけど、まとめることで、どんな効果があるのかとか、どうしてそうなったのか等のことを考えることができた。

○自分が見た授業について分析することは、自分がどのような先生になりたいかや、生徒とどのように関わりたいかなど自分の意思を発見する機会にもなった。

○討論した内容を書くことによって、より深く自分の記憶に問題点などが刻まれ、将来、自分が現場に入り、同じような問題に直面したとき、少しは解決策を導き出すきっかけになると思う。

○他の人のまとめを見て、より刺激を受けた。絵やレイアウトなど、まとめだけでない工夫を考えることも必要だと気づけました。

○他の子の意見を聞いたりしてまとめていたので、自分の考え（だけ）にとどまることがなく、いろいろな考えを知ることにつながると感じました。

表5-2. 「施設調べ」の完成に対して価値を認めた19名が問4に対して記述した内容(2012年)

○実際に子どもと関わったとき、きっと役に立つと思いました。

4年間これから学ぶことの見通しができました。保育者になりたいという思いが更に強くなり、小・中・高を見ることで、幼稚園時代での学びの大切さにも更に気づいて、「私が保育者になったら」と考えることが多くなりました。このまとめの作業は、子どもがいかに興味をもってくれるかを一番に考えまとめました。配色や構成など、慣れや練習がいると思うので、まとめる作業をたくさんできて良かった。たくさん吸収できました。

- 自分が気になった点、気づいた点を言葉にし、文章にすることによって、このように感じたのだ、と再確認することができた。
- 観察の良かった点や気になる点をまとめ、活用したい点を考えることで、本当に自分が保育者になった時にこうしたいと、意識が高まりました。
- 何も書いていない真っ白な絵に、文や絵の構成を決める所から、練習ができ、将来役に立つと思いました。
- 事前に学習を行い、考えたことを基に観察し、そこでなるほどと思ったことをまとめることで、次の学びにつながっていくので、専門家としての資質を高めるために役に立っていくのではないかと考えました。
- 施設調べを作成するために、思いだし、すぐにまとめることで、見学実習での体験をよく頭に残すことができる。施設調べを印刷し、2年生から4年生まで、いつでも見ることができるので、その時に考え、いろいろと知識を蓄え、意見が出せるように活用したい。
- テーマを設定したのを振り返りながら書くことによって、又其の部分について考えることによって、自分なりの工夫を考え、将来の自分につながるだろうと思った。
- 観察したことを振り返って考察することで、本実習の時にも、実習で得たこと一つひとつが自分の学びにつながるようになっていきました。実際に自分が教育者になった時も、1日の自分を振り返り改善点をあげることで、よりよい教育者になれるのではと思いました。
- 事後のまとめをやることで、観察実習でみてきたものを整理でき、しっかりと自分のものにできた。
- どのようなデザインにしようか、色はどのようにしようか、などと考え、工夫し、作りあげることを経験することができ、とてもよかった。またデザインを選ぶためにインターネットで調べてみると、本当にかわいい絵柄がたくさんでてきて、楽しかったです。
- どのように文字を配置したり、色をつけたら分かってもらいやすいかを考え、保育者になった時に、分かりやすい掲示物や保護者の方への案内を書く時の練習にもなり、とてもいい機会でした。
- レイアウトを考え、絵を描いたりして自分が教育現場に立った時に、掲示物や配布プリントに活かせると思った。パソコンに出てきた教育施設のたくさんの情報を自分でまとめることも身についたと思う。自分の意見・感想を言うということは教育現場では大切なことだと思うため、調べに自分の意見を書くこともいい訓練になったと思います。リアルタイムな気持ちの切り抜きができ、よかったと思います。
- 他の人の意見を聞いて自分でまとめ、書き記しておくことで、後から見直した時に工夫できるところや活かしていける場所が見つかっていいと思う。また、デザインなども一から考えて描くことは、教員になったときにも役立つし、考える力がついていると思う。

以下、アンケート調査結果について、昨年度のものと比較しながら今年度のものを見た場合、どのような違いがみられるか、あるいは先回見られなかった感想があげられているかなどを取り上げる。その上で、そのような違いが生まれた要因についても考察していく。昨年度と比較して、どのような違いがみられるか、あるいは先回見られなかった感想としてあげられているか、を以下にまとめた。

(1)「施設調べを作成することで、構成や色使いを工夫しなければならないので役に立つと思いました。また見やすく、分かりやすく書く工夫をすることも、将来に活用できると思いました。」に代表される感想・意見が今回は6名によって述べられており、「施設調べ」が保育者の資質のひとつとして求められる表現力を向上させる上で、大きな刺激となっていることがうかがわれる。

(2)「自分が担当する学年は、子どもたちの発達の中の一部である。ただその時を保育するわけではなく、その子たちの将来のために、どのような保育をすればよいのかを考えることができた。小・中・高を観察して、幼稚園時代に何を大切に保育をしたらよいか学べた。」という記述には、自分が職業的に対象とする年齢層の児童のみでなく、その他の年齢の児童の観察も大切であるという、発達の視点の大切さへの気付きが十分に読み取れる。少し補足すると、アンケート調査において、直接発達の視点への言及がない場合でも、施設調べにおいては、かなりの頻度で発達の視点への言及が認められた。

(3)「無知で観察するより絶対に内容の濃い観察になった。まとめるのは大変だったけれど自分のテーマを決め、観察時の注意事項（も調べ）、観察後の振り返りができたので、自分自身の中での確認ができた。この事前調べがなかったら、なんとなく観察して、なんとなく『あーこんな感じだったのかなー』と振り返るくらいで終わっていた。目的をもって物事に取り組むことで、意識が高まり、充実した内容になりました。『目的をもつ大切さ』を本当に感じました。」をはじめとして、13名が目的意識を持って観察することの意義を記述している意味は大きく、「施設調べ」によって明らかに意識が高まり、充実感が生まれ、主体的学びが促進されている様子がうかがわれる結果と考える。

次にある一人の学生が提出した「施設調べ」の内容の一部（附属高校については、原本の裏表をカラーコピーし、他の教育施設については見学後まとめた裏の部分のみコピーしたもの）を引用し紹介することで、本研究で目指した教育施設見学の事前学習と教育施設見学の事後学習が、初年次教育においてどのような点で有効であったかを具体的に明らかにしておきたい（図1～4）。

図1～4を挿入する

注：（ ）部分は、筆者が説明のため挿入したものである。また明らかな誤字以外は、手を加えていないため、理解しづらい点があることをお許しいただきたい。

●第1回目見学実習 5月1日 実習先：相山女学園高等学校（併設校）

- 事前学習について：事前に調べておくことで先生がどのような思いで生徒と向き合い、何を目指して授業を行っているかが少しわかって、的をしぼって観察することができました。また、「人間になろう」という（附属高校の）教育目標の意味を知った上で実習を行ったので、友達同士、互いに高めている姿を見て教育目標が実現されているとわかりました。
- （見学実習をする際の）注意事項について：時間厳守や挨拶など、基本的で当たり前のことだけど、人と接する上でとても大切なことだと再確認しました。注意事項も、事前に調べておいたことで、取り繕うことなく、自然にマナーを守ったり、元氣よく挨拶できたりしたと思います。
- （今回の見学実習における自分の）視点・テーマについて：あらかじめ、何に注意して観察するかを明確にしてあったので、初めての实習でも、先生側の視点で観たり考えたりすることができました。テーマを主に、先生と生徒の関係や、主体性についてのものをおいたので、先生の細かな気配りにも目がいって、観察がとてもスムーズにいきました。
- 感想：初めてのふれあい実習は、気付きがたくさんありました。今まで授業を受ける側の視点でしか見たことがなかったけど、教える側の視点で授業を見ることができて、今まで気付かなかった先生の気配りが見えて、不思議な感じでした。事前にしっかりと調べた分だけ実習で得ることも多くなると思うので、これから様々な年齢の生徒の観察に行くので、子どもの成長過程や、子どもに沿った教師の教育法、生徒の接し方について、より多くのことを限られた時間で吸収していきたいと思います。

●第2回目見学実習 5月15日 実習先：中学校（併設校）

- 高校と中学校の違い：教師と生徒の関係性が大きく違いました。高校では教師の呼びかけに対しクラス全体で答えていたりして、生徒も積極的に授業を受けようとする姿勢が見られたし、教師と生徒の間にある信頼関係を感じることができました。しかし、中学校では教師がたくさん話しかけたり面白く興味を引く事柄を言っても何も答えず無言であったり、周りの子とクスクスと笑い合ったりと授業の雰囲気悪くする行動がよく見られました。思春期の難しい年頃なだけあって先生を小馬鹿にするような言動や周りの反応が気になったりして、見ていてもどかしい生徒が多数いました。このような難しい時期を乗り越えて、高校の観察実習で見たような多くの生徒が自由に発言できるのだと思いました。
- 感想：今回、高校生との授業に対する姿勢の違いに驚きました。教師が興味の出る問いかけをしても反応は極めて少なく、1～3年の間に大きな成長があることを感じたと同時に中学と高校で同じような教え方ではいけないとわかりました。各々の年齢に応じた教師側のサポート、促しが大切になってくるということを実感した実

ふれあい

2012-5-1 (thu)

楊山女学園大学教育学部

第1回見学実習 2012年5月1日 実習先 附属高校

実習先 附属高校

楊山女学園高等学校

2012年5月1日(火) ☀
2限(9:50~10:40)
3年7組*現代社会*竹村先生


➡ 新教育制度の発促に伴い開校された。山添キャンパスは、幼稚園から高等学校を南北に配置した一大学地区を形成し、利便性と閑静な環境を持ち合わせている。

教育理念

人間になろう

教育目標

- (1) 体力の増強
- (2) 学力の増進
- (3) モラルの確立
- (4) 情操の育成

生きる力 



友達と切磋琢磨することで
友達と自分の両者とともに高めよう!

- 生徒自ら問題意識に基づき、研究・調査をし、まとめ、発表するという実践的な学習を取り入れる

授業体制

生徒自らが問題提起できる自主性をもてるように...

各自の能力を引き出す内容

自発的に授業に取り組む方向性

重視

生徒を積極的に参加させる

注意事項

- 1 時間厳守
↳ 15分前集合を心がける
- 2 私語は慎む
- 3 マナーを持って人と接する
↳ 誰に対しても丁寧な言葉を用いる
- 4 元気に挨拶をする
- 5 飲食禁止
↳ 学園敷地内、周辺で

観察の視点

- 教師の働きかけに対する生徒の反応
- 教師のクラス全体への目のくぼり方
- 授業の進め方や黒板の使い方
- どのような場合に生徒が主体的に取り組んでいるか
- どのような場合に生徒は集中しなくなりやすくなるのか

記録の書き方

- 詳細に見学記録をつける
- 先生側の視点、生徒側の視点の両方を記録する
- 黒板の使い方などは [X] も利用する



- 1 教師のどのような働きかけが生徒に届くのか
- 2 逸脱行動をする生徒に対する教師の対応
- 3 生徒が主体的に取り組める授業とはどのような授業か



観察で学んだこと

事前学習について

事前に調べておくことが先生がどのような思いで生徒と向き合い、何を目標として授業を行っているのか、少しわかって、自らをしばって観察することができました。また、「人間になろう」という教育目標の意味を知った上で実習に行ったので、友達同士互いに高めている姿を見て、教育目標が実現されているとわかりました。

注意事項について

時間厳守や挨拶など、基本的で当たり前のことをトクドク人と接する上でとても大切なことを再確認しました。注意事項も、事前に調べておいてことで、取り違えることなく、自然にマナーを守り、元気に挨拶できていると思います。

テーマについて

1 教師のどのような働きかけが生徒に届くか

「皆さんはいどうなの？」という問いかけをすることで生徒との距離が近い授業が行われていました。また、「見て下さい」「書いて下さい」と言うことで生徒が集中し、「ここまでやったら終わり」などと、生徒の気持ちを考えた気配りか、生徒に届いて、皆真剣に取り組んでいたことがわかりました。

2 逸脱行為をする生徒に対する教師の対応

注意するというより、会話のように「〇〇さんは何をやっている？」と聞くことでクラスの雰囲気も悪くならず、その生徒も少ししてからノートを取り直していました。まずは聞いてみるのが大切だし、しめること、注意することがいいとは限らないとわかりました。

3 生徒が主体的に取り組める授業とはどのような授業か

先生がクラス全体と細めにコミュニケーションを取ることで、アットホームな雰囲気がつくられ、とても発言しやすい環境ができていました。わからなところは大きい声ですぐに聞き、授業の内容で、関係のあるエピソードなどを生徒が言ったりする場面もあり、クラス全体が授業を受けている感じで、まさに主体的に取り組んでいます。発言しやすい環境が主体的に取り組める授業と結びついていると思います。

討論から学んだこと

4つの論点をあげて討論しました。集中の保たせ方や、生徒への気配りについて多く話し合いましたが、同じ授業を観ても人それぞれ視点が違い、自分には気付かなかったことも話し合いから気付くことができた。私は先生の気配りについて主に観察しましたが、討論から、その先生に対する生徒の様子をよく観察している子もいて、逸脱行動の種類や生徒同士の助け合いなどの気付きがありました。

討論からは、先生が質問に素早く答えられるまで言説明する、生徒が経験した事例を取り入れたり、余談を挟んで興味を持てるなど、生徒の立場に立って細かい気配りから（高関わり関係を築くことで、生徒は授業に集中し、更に主体的に取り組めるのだと気付きました。



視点・テーマについて

あらかじめ、何に注意して観察するかを明確にしてあったので、初めての実習でも、先生側の視点で考えたりすることができました。主に、先生と生徒の関係や、主体的なものをお願いしたので、先生の細かい気配りにも目がいて、観察がとてスムーズにいききました。

保育現場で活用したい点

- 細めに「どうなの？」と聞いて、回答に困った生徒に対し2回答えられるようにする丁寧な気配り
- 生徒の顔を一人一人しっかりと見て話す
- ハキハキと声を張り、ジェスチャーを使って話す

感想

初めてのふれあい実習は、気付かずにたくさんありました。今まで授業を受ける側の視点でしか見てなかったけれど、教える側の視点で授業を見ることができて、今まで気付かなかった先生の気配りが見えて、不思議な感じでした。事前にしっかりと計画を立てて実習で指導することも多くなると思うので、これから様々な年齢の生徒の観察に行くので、子どもの成長過程や、子どもに合った教師の教育法、生徒との接し方について、より多くのことを限られた時間で吸収していきたいと思います。

●第2回目見学実習 5月15日 実習先 附属中学校

高校と中学校の違い！

教員と生徒の関係性が大きく違いまして。高校では教師の呼びかけに対しクラス全体で答えていたりして、生徒も積極的に授業を受けようとする姿勢が見られて、教員と生徒の間にある信頼関係を感ずることができています。しかし、中学校では教員がほとんど話しかけたり面白く興味を引く事例を言っているにもかかわらず無言であったり、周りの子とクスクスと笑い合ったりと授業の雰囲気悪くなるケースがよく見られます。

思春期の難しい年頃なのであって先生を小馬鹿にするような言動や周りの反応が気になったりして、見ているとどかしい生徒が多々見られます。このような難しい時期を乗り越えて、高校の観察実習で見たいような多くの生徒が自由に発言できるようになるのですね、と思いました。



そこで教員の働きかけも大切だと、思いましょ。高校生のように望む答えは返ってこないかもしれないけど、めげずに積極的に話しかけ、サポートする。ような授業を展開しなければいけないし、その配慮は高校生よりも難しいと思います。

教員の工夫

●注意の仕方

…真面目に怒るのではなく、理科の授業なので、生物学的内容の言語から人間の集中力の言語につなげて注意を促している。

●興味の出る授業

…人体の言語で、焼肉に例えて生徒の知っているお肉の部位などを例に出して興味関心を引いている。

●生徒の当て方

…眠そうな子には「起きる？」と聞いたり、全体がウトウトしてきているから順番に当てていた流れを変えて、生徒を集中させる。

インタビュー

1 思春期の女子に対する教師の対応

⇒ 前回の高校生のように生徒から発信があったり、教師の問いに
 対する反応が良いとは言えません。しかし、それは難しい時期で素直に
 ではないアツがあるから。そこをきっかけに上で教師は反応が導かれて
 なくても、めげずに話し続けるし、反応がなくても生徒とコミュニケーション
 はやるためにどんどん面白いことを話し続けていました。

2 逸脱行動が少なくする授業とは

⇒ 生徒の関心のある事柄を題材にあけて授業すること、生徒の
 集中力を高めていました。また、頭ごなしに怒るのではなく授業内容から
 注意を促すことで生徒も反応すること、すんなり聞いていました。

3 生徒が自ら興味を持てる授業とは

⇒ 今回生徒の自主性が見える場面は本場にツキあったです。しかし、
 焼肉の例えなど教師が出してことに気づし、多くの食いつがあったので
 教師の積極的な振りの重要性に気付きました。教師の促しから
 発展する自主性もあるのだと思います。

討論からの学び

各々観察の視点が違ったので討論を通し多くの学びが得られました。
 討論からは「後の方で個々の雑談や逸脱行動が得られていた
 ことに気づき、私が観察して教師の工夫がどういう生徒に届いている
 ものだったことがわかりました。大切なのは声に抑揚をつけて、
 生徒に印象付けられるような例えを出して話を進めることなど
 これから私も取り入れていきたいと思っています。

感想

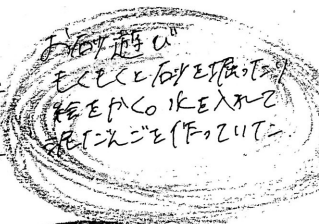
今回、高校生との授業に対する姿勢の違いに驚きました。教師が
 興味の出る答えをいっても反応は極めて少なく、1年間の間に大きな成長
 があると感じると同時に中学と高校で同じような教え方ではないのだと
 わかりました。各々の年齢に応じた教師側のサポート、促しが大切に
 なってくるということを実感して練習しました。

●第3回目見学実習 6月5日 実習先 附属幼稚園

子ども達の遊び

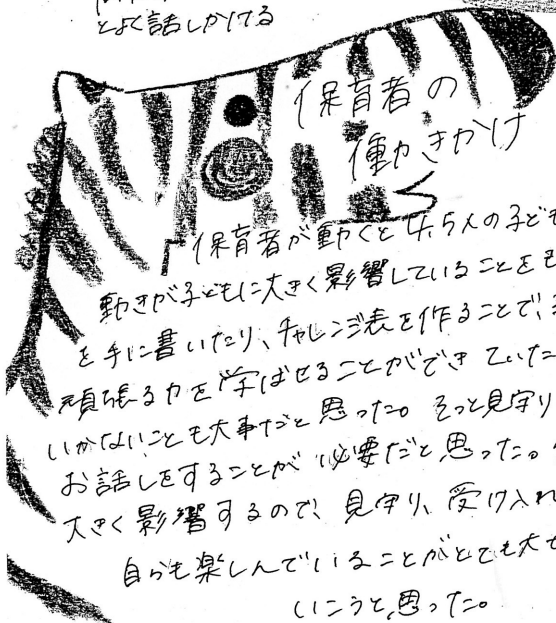
水の観察

男の子たちが水槽の周りに集まって、観察し、水槽を持ち上げて「エサをあげよう」と周りの大人に「見て見てー!!」と話をしている



縄跳び

順番を守ってしゅりと並び、跳んだ回数を保育者に子どもの手に書いてあげ、「もっと沢山跳びたい!!」という思いが溢れて、おにぎりを作っている。

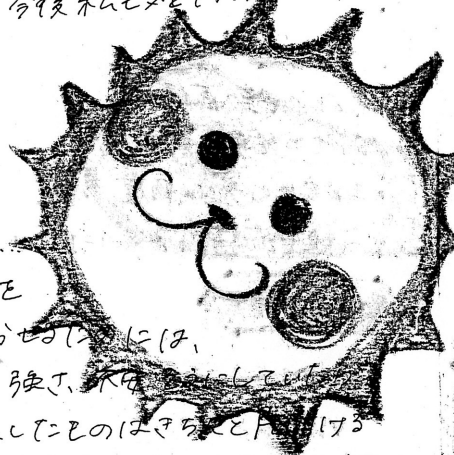


保育者の働きかけ

「保育者が動くことで、子どもが『わー!!』と動かすのを何度か見て、保育者の動きが子どもに大きく影響していることを改めて感じた。『わー!!』と足踏む回数と手に書いた、チャレンジ表を作ること、子どもの自主性や向上心が生まれ、自ら頑張る力を伸ばせることができた。また、ジャンプが止まるとすぐに跳びにいかは、いとも大勢で思った。ずっと見守り、タイミングを見はからせて仲介をし、お話しをすることが必要だと思った。保育者のタイミングや声かけは一言で子どもに大きく影響するので、見守り、受け入れ、子ども全体を見ること、それによって自ら楽しんでいくことが大切だし、今後私も気を付けていこうと思った。

中高を見てきて幼児期に大切なのは、

中高ではもう大人同様のことが出来る子どもを見てきました。中高の子ども達があんな前に落ちるには、幼児期のうちに、ありがとう、ごめんねと言う強さ、不安を感じて、そこから身につく自信、また生きたものはまたとないという生活習慣や友達と仲良くして何かをするきっかけ合いの心や、調性といふ言葉が必要だと思った。先生や友達が話をしているとき、幼児期にしっかりと学ぶ必要がある。この頃の人の心は、青少期の心と違って、開くということも教える必要がある。この頃の人の心は、開き身につけて生活習慣は、今後の性格や習慣にも影響してくるので、丁寧に身につけていく手助けをしていきたいと思った。



子どもの学びの過程、友だちとの関わり

(EPI) 女の子2人バザール場で会話をしている。彼女ら同士で「うう、シロガタリは。わかったー」と何度も説明し、自分の出来にシロを報告している。

自分のできることが増えてきたこともあって、できることと友達にうちと共有したいという気持ちがある。それがあって、それを相手に伝えたいという気持ちがある。そして、その気持ちがあるから、自分が何より先にしたいという気持ちがある。そして、その気持ちがあるから、自分が何より先にしたいという気持ちがある。

＜Ep2＞女の子2人が仲よく遊んでいた。そのはてしなく語り合った。言ひ合いになり、お互いの意見をぶつつけていた。そして、お互い、仲直りして2人は再び、とても仲よく遊びはじめた。

自分の意見を相手に伝えられるようにする。また、相手の意見を受け入れる。この二つが、コミュニケーションの基本である。

① 泥あそびで土に道具をちつかして、スコップを投げたとき、手や足が
かたじけなく、スコップの痛いはね「スコップのゴキウ」で、
おいで」と声かけをしては

おいで」と争の付合していい
② つかみ合いのケンカをしているとき、保育者は「なんで争うの？」「なんで争うの？」と問いかけ、
ときには優しく「好きよ」(ホ>ホ>) とやるんじよ」と教える。

保育者のあてに「かくて優しい声がけが」とも重要だということに、
子どもは素直に反省し、次のやり直けにつなげようとしている。保育者が「た
か」を「か」として、子どもに「か」を「た」として、次へ進めるのだとわかった。
「か」を「た」として、子どもは壁を乗り越え、次へ進めるのだとわかった。

討論所の学び

木子環境についてあまり見ていないとて
 討論会を通して自然とふれあう環境や
 個々が遊べる環境が整えられている
 ことに気付いた。また、年齢によって様々な
 特性があり、保育者との関わり方の違い
 を見かけをするタイミング、声かけの仕方など
 異なると感じ、各々の年齢に応じて
 対応をしていきたいと思います。

子どもたちは次々に新しい遊びの
を見つけ、絶えず走り回って、
その中での保育者の影響はとて
大きく、未みみとても責任の重い
職業にワングとしているのだと
改めて実感したと同時に、こ
年輩の特別教や、どんな働きか
するのかなど学んでいく必要
強く思った。

習でした。

●第3回目見学実習 6月5日 実習先：附属幼稚園

○中高を見てきて幼児期に大切なこと：中高では、もう大人同様なことができる子どもを見てきました。中高の子ども達があたり前に暮らせるためには、幼児期のうちに、ありがとう、ごめんね、を言える強さ、不安そうにしていたら安心感を与え、そこから身につく自信、また出したものはきちんと片付けるといった生活習慣や友だちと協力して何かをする助け合いの心や協調性を幼児期にしっかりと学ぶ必要があると思った。先生や友だちが話をしているときは、静かにしっかりと聞くということも教える必要がある。この頃の人との関わりや身につけた生活習慣は、後の性格や習慣にも影響してくるので丁寧に身につけていく手助けをしていきたいと思った。

○感想：子どもたちは次々に新しい遊びを見つけ、絶えず走り回っていた。その中で保育者の影響はとても大きく、私はとても責任のある職業につこうとしているのだと改めて実感したと同時にもっと年齢の特徴や、どんな働きかけをするのかなど学んでいきたい。

●第4回目見学実習 6月19日 実習先：附属小学校

○感想：最後のふれあい実習でした。小学校は4年生ということもあり、幼稚園の子よりはるかに成長していて、自分たちで協力してやることや、相手の意見を聞き入れることが可能となっていました。反対に中学生と比べると素直さが目立ちました。中学生は恥ずかしそうにする場面やダルそうにしたり、素直になれないというところをよく見かけましたが、その点小学生はとても素直に先生の指示を聞き、頑張っていました。4つの年代を見て、それぞれ特徴が大きく異なるし、そこに反応する教育者の対応や与える課題も異なり、それぞれに対応しなければならないと思いました。色んな年の子どもの様子、更に先生の対応を観察できてとても楽しかったです。

この学生の上記の記述を整理してみると、

- (1)事前に調べておくことで、的をしぼって観察することができ、調べた分だけ実習で得ることも多くなる
- (2)幼児期の人との関わりや身につけた生活習慣は、後の性格や習慣にも影響してくる
- (3)思春期の難しい時期を乗り越えてこそ、高校の観察実習で見たような多くの生徒が自由に発言できる
- (4)4つの年代を見て、それぞれ特徴が大きく異なるし、そこに反応する教育者の対応や与える課題も異なり、それぞれに対応しなければならない
となり、先のアンケート調査の結果を補足するものと考える。

4. 考察

今回の研究では、教育施設見学の事前学習と教育施設見学の事後学習が、初年次教育において有効であることを追試するとともに、昨年度の反省を踏まえた上で、筆者がこれまで重視してきた「施設調べ」の枠組みに更に改良を加えた。それを活用して事前・事後学習をおこなうことで、学生がこれまで以上に「主体的な学び」ができると予測し、研究をおこなった。今回実施したアンケート調査等の結果より、それが検証されたと考える。

主体的学びがなされているかどうかの基準として、先に述べたようにアンケート調査における「施設調べ」の「役に立った程度」をもって、主体的学びが促進されたと解釈した。その結果 20 名全員が役に立った、そのうち 13 名がとても役に立った、と述べており、その意味は大きい。さらに、13 名の学生がその理由として、「目的意識を持って観察することの意義」をあげている点からも、「施設調べ」という枠組みには、「目的意識を持って観察しようとする姿勢を生みだす仕組み」が備わっていると考えられる。鈴木（2004）の言葉を借りれば、「施設調べ」の中に、キャラクターを登場させるといったストーリー性、見学実習のテーマをあらかじめ決めておくなどといった問題解決を促す設定などが用意されており、見学実習参加学生の内発的動機を高め、学びの主体性や思考活動を刺激する仕組みが取り入れられているといえよう。

次に、「施設調べを作成することで、構成や色使いを工夫しなければならないので役に立つと思いました。また見やすく、分かりやすく書く工夫をすることも、将来に活用できると思いました。」に代表される感想・意見が今回は 6 名によって述べられており、「施設調べ」が保育者の資質のひとつとして求められる表現力を向上させ、さらに将来利用できると感じさせることで、調べをする際の動機付けともなり、見学参加学生の主体的学びを促進させていると考える。

またアンケート調査上の人数としては多くないが、「自分が担当する学年は、子どもたちの発達の中の一部である。ただその時を保育するわけではなく、その子どもたちの将来のために、どのような保育をすればよいのかを考えることができた。小・中・高を観察して、幼稚園時代に何を大切に保育をしたらよいか学べた。」という記述をした学生からは、自分が職業的に対象とする年齢層の児童のみでなく、その他の年齢の児童の観察も大切であるという、発達の視点の大切さへの気づきが十分に読み取れる。この点については、事前指導等において、筆者が強調した発達の視点が学生の中に意識されていった証拠と考える。発達の連続性、つまり子どもから大人へという、連続した発達の流れの中で、自分が関わる一時期を理解し、その時期に将来を見据えた実践をする必要があること、そのためには幼稚園・小学校・中学校・高校のすべてを見学しておくことは極めて有効であることを、特に心理学を専攻し Erikson の考え方を学んできたものとして、機会をみて何度も説明し、4 教育施設を見学実習する意義（発達の視点）の明確化を図ったことによる成果も大きいと考える。

以上の点と重複する部分もあるが、昨年度の反省から、改善を図った以下の3点も「施設調べ」の効果を高める要因になったといえよう。

第一は、学生の課題作成における負担の軽減

第二は、施設（学校）見学の視点（特に発達の視点）の明確化

第三には、「施設調べ」の枠組みをより具体的な内容のものにしたこと

このように、「施設調べ」という課題を初年次の見学実習において実施することを通じて、「学びの主体性」に焦点を当てつつ、その効果についても明らかにすることができたと考える。ただし、今年度も学生からいくつかの提案や課題が示されたので、それを紹介しつつ、次の研究に活かしたいと考える。

一つ目は、「討論することの意義」についてである。ある学生は「まず自分の意見を先にまとめることで、実習で感じたこと、得たことを、言葉としてより分かりやすく理解できたとともに、振り返ることで、自分のものとすることができたと思います。そして、討論をし、他の人の意見を聞くことで、自分では気付かなかった考え方や、新たな視点で、改めて理解することができたので、討論もとても大切だなと感じました。」と述べている。この学生の思いは、柏崎（2012）の「ある課題について自ら体験や調査によって学習した場合、そこで知り得たことをいかにまとめるかだけでなく、調べ学習を通じて自分がいかに考えたかに焦点を当てる指導が重要であり、主体的な学びの成果をいかに言語化するかにも、目を向けるべきである。」という主張にもつながるものであり、「学びの主体性」を考える上で、「討論すること」、別の言い方をすれば、「学びの成果の言語化の過程」の重要性が確認できたといえるが、次の研究では、事後指導における討論の意義についても更に検討を加えたいと考える。

二つ目は、「見学実習の組み立て」についての意見である。ある学生は、「四か所の（教育施設で）発達段階を通して見れたことは成長過程の中で、とてもよい経験になったし、問題点を見つけることもできた。しかし、もっと見学して学んだことを分かりやすく比べるために、幼→小→中→高または高→中→小→幼といった順番に実習をしたかったです。また、一度だけでなく同じクラスに二回くらいずつ行って、もっと観察だけの実習を長い期間を利用して行いたかったです。でも、全体を通してはこの観察実習はとてもためになったし、これから勉強していく上でも役立つと思えました。」と述べている。これは、とても理にかなった前向きな意見であり、今後、この授業の組み立てを考える際に参考にしたい。

第三には、「役に立った」ということとは少し異なった次元での学生の意見として次のようなものがあった。「目的やテーマ設定は役に立つと思ったが、やらないグループもあるし、見学後に事前レポートを書く人がいる中で、本当に役立っている人が実際はどれだけいるのか疑問である」というものである。

これについては、学びの過程において、目的を達成するための方法はいろいろあってよい、つまりある方法を採用するグループもあれば、そうでないグループがあってもよい、と筆者は考えている。ただし、それを学生の納得できる形で説明することは

必要であると考えするため、次年度の授業では工夫したい。もうひとつの課題の、物事を一定の時期までに、きちんとやるかやらないかについて、どこまで教員が入り込むかは微妙な問題を含んでいると感じる。大学の教育の中で、どこまで学生の指導に入り込むかは、「学びの主体性」を考える時、簡単に答えはでないと思われるが、定められた時間の中で課題をすることの意義についても学生ときちんと話し合うことは大切であると考え。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、大変お忙しい中、本学教育学部准教授、野崎健太郎博士に原稿を査読いただいた上で、様々な角度から適切な助言・指導をいただいたことに対し、心から感謝する。また、授業において、本研究を進める上で協力をしていただいた学生の方々にもお礼を申しあげる。

■参考・引用文献

- E.H.Erikson : Childhood and Society. Norton, p.247-274, 1963 年
- 奥 明子ほか：保育者を志す学生の保育所実習前後の意識変化—保育所実習に関する学生へのアンケート調査から—, 保育士養成研究, 第 27 号, p. 45-54, 2009 年
- 柏崎秀子：教職課程における主体的な学びと言語力育成—ポートフォリオによる自己評価の変容—, 実践女子大学文学部紀要, 第 54 集, p. 35-44, 2012 年
- 須藤康恵ほか：ケース検討形式”を中心とした実習事後指導のあり方に関する一考察, 保育士養成研究, 第 27 号, p. 65-72, 2009 年
- 鈴木京子：Web 教材開発における学びの仕掛けとは何か—中学数学・授業研究からの示唆—, 日本教育情報学会第 20 回年会講演要旨集, p. 132-133, 2004 年
- 鈴木大介：実践教育導入期における「観察演習プログラム」の有用性—保育士養成教育における取り組み—, 保育士養成研究, 第 24 号, p. 1-10, 2006 年
- 中津愛子ほか：保育所実習の事前指導における保育所見学観察実習, 保育士養成研究, 第 25 号, p. 19-25, 2007 年
- 服部次郎・谷田貝雅典：保育実習（施設）の意義について—実習を終えた学生のアンケートから見えてくるもの—, 岡崎女子短期大学研究紀要, 第 43 号, p. 47-54, 2010 年
- 服部次郎：保育者・教師養成課程における初年次教育としての施設（学校）見学を充実させる事前学習の実践—学生が主体的に学ぶことを目指した「施設調べ」の試み—, 椋山女学園大学教育学部紀要, 第 5 号, p. 147-164, 2012 年
- Brian M. Foss : New Horizons in Psychology 1. Pelican Book, p.386, 1972 年